

8月3日(水)発行

MUZA  
KAWASAKI  
SYMPHONY HALL

ほぼ  
**日刊サマーミュージック**

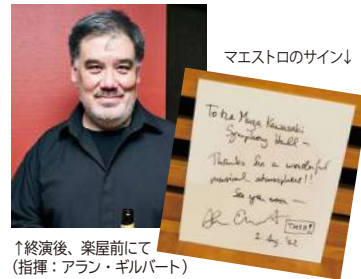
Hobo Nikkan Summer Muza



**ギルバート&都響らしさ満点の快演!**

8/2 東京都交響楽団 ゴージャス! 腕利き集団が奏でる名曲集

©T. Taira date



マエストロのサイン↓

↑終演後、楽屋前にて (指揮：アラン・ギルバート)

**お客様から**

マエストロの指先から紡ぎ出される色彩豊かな都響の皆さんのサウンドがミュージアいっぱい広がっていました。多彩なプログラムで大満足。プレトークで大好きなマエストロのお話が聞けたのも幸せでした。(50代・きよ) / プロコフィエフは昨年のアンサンブル金沢の古典交響曲の演奏と比べて聴いていました。ラフマニノフは昨日の小川典子とイリヤの2台ピアノによる演奏と比べて聴いていました。こんなサマーミュージアの楽しみ方も面白くて好きです。(60代・HMO) / 都響の音は感動的でした。「アルルの女」組曲のコンマスとヴィオラ奏者のデュオはすばらしかったです。指揮者のアラン・ギルバートさんが当たり前のように全員様に演奏をたたく姿は良かったです。プレトークにあったようにさりげなく演奏されていました。リズムもタイミングもみごとに音量もすばらしかったです。又、都響を聴きに行きたいと思わせるものでした。(70代・OKANOUE) / ギルバートさんと都響との相性の良さが演奏からもプレトークからも感じられました。ピゼーとラフマニノフでの住谷さんのサクソフォンの音色にはうっとりしました! (60代・アラン大好き) / アラン・ギルバートさんと都響、まさに相思相愛! 抜群の好相性!! (60代・虎徹)



鳴りやまない拍手に応じて、コンサートマスター達と

アラン・ギルバートが指揮台に立つと、会場が明るいエネルギーで満たされる。オーケストラの楽しさを満喫するコンサートとなった東京都交響楽団公演は、終演後拍手がやまず、指揮者とコンサートマスターが舞台上に呼び戻されるほどの盛り上がりを見せた。

プロコフィエフ「古典交響曲」は12型(第1ヴァイオリンの人数)で、引き締まった演奏を構築。思いのほか堅実な流れで始まったが、安定感を保ちながら自在な表情や遊び心も随所に散りばめられ、爽快な好演になった。

ピゼー「アルルの女」はマエストロが選んだ5曲構成で、14型に拡大。やはり丁寧で締まった響きを維持し

つつ、自由な感興と色彩感も引き出して秀逸。「カリヨン」中間部の木管の感動的な歌、「アダージェット」の弦の淡い哀感の美、「ファランドール」の完璧なバランスから生み出される熱狂(名演!)など、名作を新鮮に堪能できた。

16型に達したラフマニノフ「交響的舞曲」は、踏みしめるようなステップで「舞曲」としてドライブしながら、情感も豊かで胸に迫る。深刻さを強調し過ぎず、打楽器も抑制を効かせて(結尾の銅鑼は数秒間残してからミュート)、スマートなサウンドが気持ちよく響き渡る。「祖国ロシアに帰れぬ作曲者の最晩年作」ではなく、「アメリカのラフマニノフ」の前向きな傑作」とし

て納得できる、ギルバート&都響らしさ満点の快演だった。

最後に、凛としたソロを聴かせたゲスト・サクソフォンの住谷美帆と、急遽のゲストフルート首席奏者として考え得る最高のパフォーマンスを見せたN響の神田寛明に最大級の称賛を送りたい。(音楽ライター 林昌英)

**配信控え室から**



サマーミュージアは配信も充実!  
見どころ・聴きどころや  
配信の現場の声をお届けします。



見ている人が音楽に引き込まれるような映像の流れを考えました。画面の向こうにも会場の熱量を届けたい。でも実際に実現するのはカメラマンさんの協力が必要、チームワークが重要なんです。

(From ディレクター)

**上記レビュー公演のアーカイブ配信は  
8/4(木) 正午から開始!**

【出演】指揮：アラン・ギルバート  
(東京都交響楽団 首席客演指揮者)

【曲目】プロコフィエフ：交響曲第1番「古典交響曲」  
ピゼー：「アルルの女」から  
ラフマニノフ：交響的舞曲

【配信限定コンテンツ】  
オープニングインタビュー：鈴木優 (東京都交響楽団 ホルン奏者)



**猛** 暑の新百合ヶ丘に少し乾いた夏の風が吹いた、そんな感じがした。秋山和慶と東京交響楽団による「出張サマーミュージーザ@しんゆり！」のプログラムは、ブラームスの4つの交響曲のうち、偶数番の2曲を取り上げた。開演は17時。まだ陽も落ち切らず、テアトロ・ジューリオ・ショウワに向かう道は、午後の熱気をそのまま留めていた。偶数番だから、まず第2番から、と思い込んでいたのだが、前半

はブラームス最後の交響曲である第4番からスタート。晩年に近いブラームスの巧緻を極めた音楽を、秋山の流れるようなタクトに応じて、コンサートマスター・水谷晃以下の東京交響楽団のメンバーが熱く歌い上げる。少しも力まず、ちょっとした合図で、その音楽を引き出す秋山の手腕にあらためて感心してしまった。

後半は第2番。オーストリアの夏の避暑地で書かれたこの交響曲こそ、やはり夏の音楽祭にはふさわしい。しな

やかな棒の動きのなかに、時に左手でニュアンスを付け加える秋山の指揮ぶりは、傘寿を迎えた人とは思えない若々しさ。編成にチューバを加えたブラームスの意図は、夏こそ物憂い、とでも言いたげなのだが、そこに懐かしさを感じさせるのが秋山流なのかもしれない、と聴きながら感じた。とても貴重な時間が流れたのだが、それは記憶にだけ残り、その時間は帰っては来ない。さよなら、夏の日。

会場の外に出れば、夕暮れがまだ僅かに残り、吹く風が心地良かった。

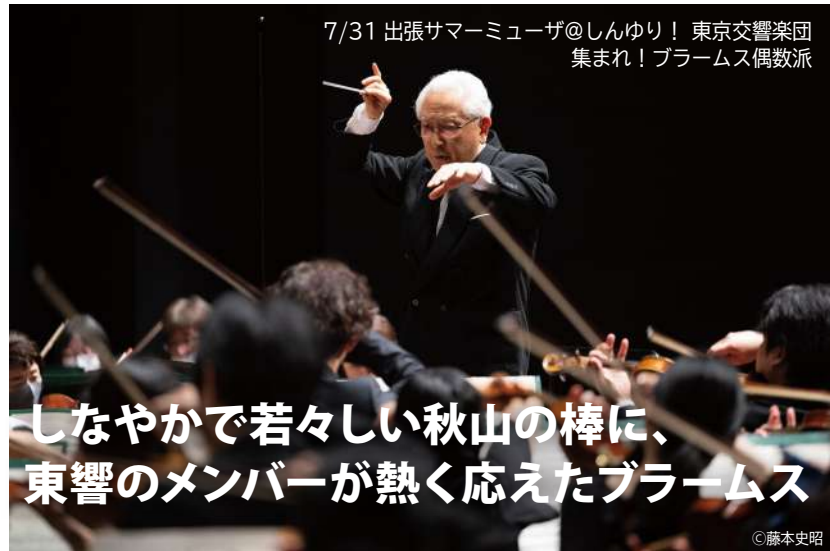
(音楽ライター・片桐卓也)



↑左から、アシスタント・コンサートマスター 廣岡克隆(81付で東響楽団長就任発表!)/指揮:秋山和慶/コンサートマスター水谷晃

お客様から

秋山さんと東京交響楽団のブラームス! 大船ののったつもりで音に身をゆだねることができました。一言一言に乾いた心がうるおされて、夏の夕暮れを迎えられそうです。私は今日の演奏で2番が好きになりました!(50代・しがのふ)/秋山先生の指揮は迫力満点でとても好きです。また来たいです。(20代・たんたん)/濃厚な響きが素晴らしいかったです。ホルン大野さんBravissimo!!(50代・餃子)/クライマックスなのにあくまで静かな指揮振りに見入ってしまいました。脱力の魅力ですね。(50代・開場時間前倒しに感謝)/特に派手な演出があるわけでもなく、ただ誠実にブラームスの交響曲に向き合った丁寧で本質を見据えた演奏だと感じた。(50代・M.M)



7/31 出張サマーミュージーザ@しんゆり! 東京交響楽団 集まれ! ブラームス偶数派

しなやかで若々しい秋山の棒に、東響のメンバーが熱く応えたブラームス

©藤本史昭



終演後のひとコマ

上記レビュー公演のアーカイブ配信は 8/3(水) 正午から開始!

※しんゆり公演は公演の3日後からとなります。ご了承ください



パートナーショップのご紹介 エンジョイ! 川崎!! Enjoy Kawasaki



野菜を好きになる、ちゃんぽん

うだるような暑さには冷やし&ピリ辛が最強! ということで冷製豆乳坦々ちゃんぽんをオーダー(中サイズ、税込930円)。紙エプロンを着けて準備万端です。

シャキシャキ野菜がてんこもりの一杯には、野菜が250gも入っているのが罪悪感なく満腹になれるのがうれしいところ。胡麻が効いたピリ辛スープにモチモチの麺が絡み、お箸が止まりません。うっかり小サイズをオーダーしてしまったため、勧められた卓上調味料に手を出すまでもなく、あっという間に完食してしまいました。次回は味変も楽しみたい! ごちそうさまでした。 ※冷製豆乳坦々は期間限定メニューです。お店に急いで! (み)

アゼリア地下 じげもんちゃんぽん

パートナーショップ特典 ワンドリンクサービス ソフトドリンク 同伴者も利用可

フェスタサマーミュージーザ公式サイト https://www.kawasaki-sym-hall.jp/festa/

#フェスタサマーミュージーザ #夏ジャン て検索 & 投稿 お待ちしています!



Twitter: @summer\_muza Facebook: @kawasaki.sym.hall Instagram: @muzakawasaki

あれから二十年。ご縁あって本日開催の、直純先生の生誕九十年と、先生が創立に尽力された新日本フィル創立五十周年のコンサートに関わる。関係者の皆さまのご協力あって今日この日を無事に迎えられることに感謝しつつ天国の直純先生に思いを馳せる。(藤井佳依)

コンサートと一緒に もうひとつのお楽しみ!

PARTNER SHOP



↑サービス対象店舗はこのPOPが目印! スマホからクーポン券を提示するだけ! クーポン券は7/23~8/11まで 何度でも利用できます。公演がない日でももちろんOK!

日刊サマーミュージーザ Hoho Nikkan Summer Muza

「違つよ、そのラの音ー」 オケストラのチューニングのラの音が合っていないと、何度もやり直しになった。後にも先にもこのような経験をしたことは一度もない。 私は山本直純先生が指導したジュニア・フィルハーモニック・オーケストラの一員として先生から約2年間、直接指導を受けた。普段は、分厚い眼鏡をかけ、髭を生やし、NAOZUMIと書かれたトレーナーを着るおじいちゃん。が、指揮棒を持ったときには120%の力を注ぎ、愛あふれる熱心な指導をしてくださった。先生との思い出の曲は、ペルリオーズの「ラコッツィイ行進曲」。強弱の入れ替わりの激しい曲で何度も練習をした記憶がある。先生はとりわけ弱音にこだわった。強弱がはつきりとし、音楽が生き生きとくる瞬間を目の当たりにした当時の私はいたく感動した。 ちょうどその頃、オーケストラの魅力にはまり、音大に入ろうとクラシック音楽業界で仕事をしたい、と思うようになった。

スタッフ日誌